

遡及的派生名詞に関する一考察

杉浦克哉

要旨：本稿は遡及的派生名詞の統語上の性質に焦点をあてる。遡及的派生名詞についての先行研究を概観し問題点を指摘した上で、*want*, *need* などの要求を意味する動詞の補部に現れる遡及的派生名詞は *vP-VP* 階層を内在する単純出来事名詞であると主張する。

1. 導入

本論文では遡及的派生名詞の統語上の性質に焦点を当てる。(1a, b)において動名詞の目的語は、母型主語 *This issue* に遡って解釈されるという点において遡及的であるといえる。そのため(1a, b)の *considering*, *looking after* は遡及的動名詞と呼ばれる。また (1c)において *reconstruction* の対象は母型主語 *The site* であるため、本稿では *reconstruction* も遡及的派生名詞と呼ぶこととする。¹

- (1) a. *This issue is worth considering further.*
 b. *This issue needs (some careful) looking after.* (Safir (1991: 100))
 c. *The site deserves reconstruction.* (Arimura (2008: 11))

Sugiura (2011)は(1b)の *need* や *want* のような要求を意味する動詞の動名詞補部は名詞的動名詞であると分析する。この分析と Grimshaw(1990)や Snyder(1998)らが行った派生名詞に対する分析から、本稿では(1b)の動名詞補部 *looking after* と(1c)の *reconstruction* は単純出来事名詞であると主張する。さらに派生名詞内に *VP* が存在することを示す経験的な証拠があることからそれらは *vP-VP* 階層を内在すると提案する。²

以下ではその異なる統語的振る舞いから、(1a)の *worth* を用いた遡及的動名詞を含む文を *Worth Type* と、(1b)のような要求の意味を示す動詞が遡及的動名詞を補部にとる文を *Need Type* と呼んで区別する。

本論文の構成は以下のとおりである。2節は派生名詞についての先行研究である Grimshaw (1990)と Snyder (1998)を概観する。3節は *Need Type* の動名詞補部と遡及的派生名詞は単純出来事名詞であると主張する。4節では Fu, et al. (2001)と Arimura(2008)による派生名詞についての先行研究を概観する。ここでは副詞が派生名詞を修飾できること、*VP* 照応形である *do so* が派生名詞を先行詞とすることができることから、遡及的派生名詞は *VP* を内在することを示す。そして5節では Arimura の主張を修正し、遡及的派生名詞は *vP-VP* 構造を含む単純出来事名詞であると提案する。さらに残された問題点を挙げ結びとする。

2. 派生名詞に関する先行研究

2.1. Grimshaw (1990)

伝統文法において名詞は結果名詞(*result nominals*)と過程名詞(*process nominals*)に分類されていた。しかし Grimshaw (1990)はこの分類を発展させ、派生名詞を複合出来事名詞(*complex event nominals*)と単純出来事名詞(*simple event nominals*)の2つに分類する。Grimshaw (1990: 49)は結果名詞を「ある過程や

過程に関連する要素の結果を表す名詞」、そして過程名詞を「過程あるいは出来事を表す名詞」と定義する。また複合出来事名詞を「項構造を持つ名詞」、そして単純出来事名詞を「項構造を持たない名詞」とそれぞれ定義する。

結果名詞と過程名詞の区別を表す例として examination と exam がよく用いられる。(2a)において、examination/exam は具体的な実体を持つ試験用紙(問題用紙や解答用紙)を指すゆえにこれらは結果名詞である。一方、(2b)の examination は出来事を表すため過程名詞である。Grimshaw の分類に従うと(2b)の examination はその目的語である the patients を of により具現化し、項構造を持つため複合出来事名詞であり、対して(2a)の examination/ exam は of により目的語を具現化していない、それゆえ項構造を持たないため単純出来事名詞である。³

- (2) a. The examination/exam was long/on the table.
 b. The examination/*exam of the patients took a long time/*was on the table.
 (Grimshaw (1990: 49))

さらに expression や assignment といった派生名詞もこれと同様の観点から複合出来事名詞と単純出来事名詞に分類される。(3a)の名詞句 expression は of により目的語が具現化されておらず項構造を持たない。そのため結果名詞であり単純出来事名詞である。しかし(3c)のように expression が形容詞 frequent に修飾されると expression は of により目的語を表す必要があるため複合出来事名詞となる。(3b)は非文法的であるが、この理由を Grimshaw は frequent は複合出来事名詞と共起するためであると述べる。

- (3) a. The expression is desirable.
 b. * The frequent expression is desirable.
 c. The frequent expression of one's feelings is desirable. (ibid.: 50)

次に(4a)において assignment は結果名詞/単純出来事名詞であるが、assignment が constant により修飾されると複合的出来事名詞となり of 句が必要となる。

- (4) a. The assignment is to be avoided.
 b. * The constant assignment is to be avoided.
 c. The constant assignment of unsolved problems is to be avoided. (ibid.)

次に派生名詞が共起できる限定詞についてまとめる。(5a)の assignment は結果名詞/単純出来事名詞で、(5b)の assignment は複合出来事名詞である。(5a)から、不定冠詞 an や数詞 one、指示詞 that は結果名詞/単純出来事名詞と共起することが分かるが、(5b)からは、the 以外の限定詞は複合出来事名詞と共起できないことが分かる。

- (5) a. They studied the/an/one/that assignment.
 b. They observed the/*an/*one/*that assignment of the problem. (Grimshaw (1990: 54))

- b They observed the/*an/*one/*that assignment of the problem. (Grimshaw (1990: 54))

そして(6)は、結果名詞/単純出来事名詞は複数化できるが(6a)、複合出来事名詞は複数化できないこと(6b)、複合出来事名詞は無冠詞で用いることができること(6c)を表す。

- (6) a. The assignments were long.
 b. * The assignments of the problems took a long time.
 c. Assignment of difficult problems always causes problems. (ibid.: 54)

最後に複合出来事名詞と-ing名詞を比較する。Grimshawによれば名詞的動名詞は一部の語彙化した例を除くと、複合出来事名詞と完全に同じ振る舞いを示すとされる。(7a)から名詞的動名詞は限定詞theを伴っても容認されるが、不定冠詞anや数詞one、指示詞thatをとると容認されないことがわかる。(5b)と照らし合わせると名詞的動名詞と複合出来事名詞は同じ振る舞いをする事がわかる。さらに(7b)は名詞的動名詞は複数化できないことを表す。これらからGrimshawは名詞的動名詞は複合出来事名詞であると主張する。

- (7) a. The/*a/*one/*that shooting of rabbits is illegal.
 b. * The shootings of rabbits are illegal. (cf. ibid.: 56)

2.2. Snyder (1998)

Snyder (1998: 127)は、複合出来事名詞の複数化は許されないが単純出来事名詞の複数化は許されるという点ではGrimshawと同じ立場に立つ。つまり(6a, b)に対する文法性の判断についてはSnyderとGrimshawは意見が一致する。しかしfrequentやconstantなどの頻度を表す形容詞が派生名詞を修飾する場合においては、SnyderとGrimshawの見解が異なる。Grimshawは(3c), (4c)のようにfrequentやconstantなどの頻度を表す形容詞が派生名詞を修飾すると、それらは複合出来事名詞になると主張するが、Snyderはそれに対する反例を提示する。

(8), (9)はoccurの主語に現れるのは命題ではなく出来事であることを示している。(8)においてoccurの主語である文主語(8a)、名詞節(8b)はいずれも命題を表す節や句で、これらがoccurの主語位置に現れると非文となる。それに対し(9)では、occurの主語は複合出来事名詞electionを含むゆえに出来事を表し、そして(9)が文法的であることから、出来事はoccurの主語に現れることができる事がわかる。

- (8) a. * That the department elected John occurred last year.
 b. * The fact that the department elected John occurred last year. (Snyder (1998: 126))
- (9) The department's election of John occurred last year. (ibid.)

しかし(9a)にfrequent/constantを加えた(10a)は非文法的である。この理由をSnyderは、frequentやconstantが出来事を修飾すると、それは命題へと変わるからであると考えている。これは(8)が非文法的であるのは、命題はoccurの主語位置に現れることができないためという仮定に基づく。加えて(10b)は

frequent/constant が派生名詞 election を修飾する場合、Grimshaw が(3b, c)(4b,c)で行った分析に反し、election が of 句を伴っていないでも容認されることを表す。

- (10) a. * The department's frequent/constant election of John occurred last year.
b. Frequent/constant department elections occurred last year. (cf. *ibid.*: 129)

Grimshaw は(3b, c)(4b, c)において、派生名詞 expression, assignment が形容詞 frequent, constant に修飾される場合、派生名詞句は複合出来事名詞としてのみ認可されるという理由から(3b)(4b)の非文法性を説明した。しかし Snyder によれば(11)の文法性から、派生名詞が frequent や constant により修飾される場合、それは命題を表し複合出来事名詞ではないとされる。それゆえ Snyder は(3c)(4c)の派生名詞句 the frequent expression of one's feelings, the constant assignment of unsolved problems は命題であることを示唆する。

- (11) The department's frequent/constant election of John surprised the dean. (*ibid.*: 129)

また、Snyder は frequent, constant 以外の量化詞が派生名詞を修飾する例として(12)を挙げる。

- (12) Several/three elections occurred last year. (*ibid.*: 127)

表 1 に Snyder の主張をまとめる。以下、本稿では表 1 に示す Snyder の分類に基づき議論を進める。

表 1 英語の派生名詞についての解釈

| | 命題 | 複合出来事名詞 | 単純出来事名詞 |
|-------------------------------|----------|----------|--------------|
| Occur との共起 | 不可 (8) | 可能 (9) | 可能 (10b) |
| 複数化 | 不可 | 不可 (6b) | 可能 (6a, 10b) |
| <i>frequent/constant</i> との共起 | 可能 (10a) | 不可 (10a) | 可能 (10b) |
| 量化詞との共起 | 不可 | 不可 | 可能 (12) |

(cf. *ibid.*: 130)

3. 遡及的派生名詞に対する単純出来事名詞分析

3.1 複合出来事名詞(Arimura (2008))

Arimura (2008)は(13)(=1c)における遡及的派生名詞 reconstruction を、3つの理由から複合出来事名詞と分析する。ここではそのうちの2つを挙げる。

- (13) The site deserves reconstruction. (Arimura (2008: 11))

1つ目の理由として、(14)に示すように動作主指向の形容詞 deliberate, careful は複合出来事名詞のみを修飾できるが故に(Grimshaw(1990: 51,52))、(15)において deliberate, careful に修飾された遡及的派生名詞

infringement, management は複合出来事名詞であると考えられるというものである。ただ infringement, management はいずれも of 句による目的語の具現化が表層でなされていないため、これらを複合出来事名詞と分析することは問題となる可能性がある。

- (14) a. the vet's intentional examination of the cat.
 b. * The intentional exam is desirable. (ibid.: 115)


- (15) a. All the other intellectual property acts demand deliberate infringement by the defendant.
 b. Ethanol production requires careful management for the greatest environmental benefits. (ibid.)

2つ目の理由として Arimura は、派生名詞の動作主が by 句によって導かれる場合、必ず補部が標示されなければならない例(16)を挙げ、それを遡及的派生名詞が by 句を伴うにもかかわらず表層で of 句が具現化されない(17)と照らし合わせる。⁴ この事実から Arimura は(17)の rejection は基底では of 句を補部として保持していたことを予測する。

- (16) a. The expression *(of aggressive feelings) by patients
 b. The assignment *(of unsolvable problems) by the instructor
 c. The examination *(of the papers) by the instructor (ibid.)

- (17) This application merits rejection by the parole board. (ibid.)

Arimura は(17)の遡及的派生名詞 rejection は基底構造として(18)を持ち、of の補部にある名詞句が母型主語へ A 移動することで(17)が派生すると仮定する。この理由から(17)の rejection は複合出来事名詞であると主張する。

- (18) X merits rejection of this application by the parole board.
 (cf. ibid.)

これら2つの理由から Arimura は遡及的派生名詞を複合出来事名詞と分析する。

3.2 Arimura (2008)の問題点: 単純出来事名詞分析

3.2 節では遡及的派生名詞を複合出来事名詞とする Arimura の分析に対し、問題点を指摘し、遡及的派生名詞は単純出来事名詞であると提案する。

まず名詞句からの A 移動は、take advantage of などのイディオム(19)や take a picture of などの絵画名詞句(20)からの移動を除くと通常許されない。

- (19) a. We took advantage of the students.
 b. The students were taken advantage of. (Akimoto (2002: 103))

- (20) a. If someone told lies about me I'd be pretty mad.
 b. If I were told lies about I'd be pretty mad. (cf. Bolinger (1975: 61))

このため、遡及的派生名詞に対し(18)の A 移動分析を仮定することは問題となる。遡及的派生名詞が基底で(18)のような構造を持っていないとすると、(17)の rejection は複合出来事名詞ではないと予測することが妥当と思われる。

(5)で述べたように単純出来事名詞は不定冠詞 a や数詞 one による修飾が可能である。さらに(21a)の遡及的派生名詞 shake-up が不定冠詞 a を伴う例や、(21b)にあるように遡及的派生名詞が量化詞 some を伴う例が存在する。これらを考慮すると遡及的派生名詞は単純出来事名詞と考えることが妥当である。⁵

- (21) a. We believe that the whole bureaucracy needs a thorough shake-up. (Arimura (2008: 19))
 b. The baby could use some attention. (Clark (1990: 52))

さらに、この分析は名詞的動名詞を補部に持つ Need Type にも適用することができる。(22)において、Need Type の動名詞補部は副詞による修飾は許されず形容詞による修飾のみが許される。(23)では、Need Type の動名詞補部は量化詞 one, several や形容詞 goof, thorough などと共に起できることと、複数化が可能であることがそれぞれ示される。これらの事実から Need Type の動名詞補部は名詞的であることが分かる。

- (22) This house needs (*seriously/serious) cleaning.
 (23) a. This house needs at least one good cleaning.
 b. This house needs several good cleanings. (cf. Miller (2002: 302-303))
 c. This overcoat wants a thorough cleaning. (Safir (1991: 105))
 d. John could use a good looking at. (Clark (1990: 26))

名詞句からの A 移動は(19)(20)の場合以外では通常許されないことを考えると、Need Type の補部も基底で(18)のような構造を持っていたとは考えにくい。そのため(22)(23)における遡及的名詞的動名詞もまた単純出来事名詞と分析する。

4. 遡及的派生名詞の統語構造

近年の派生名詞に関する先行研究として、過程名詞を修飾する副詞が存在すること、過程名詞が do so の先行詞になることができることから、過程名詞内に VP が存在することを提案する van Hout and Roeper (1998)や Fu et al. (2001)などがある。本節では彼らの主張に従う。4.1 節で Fu et al. (2001)の提案を、そして 4.2 節では Fu et al.らの分析を派生名詞に適用した Arimura (2008)を概観する。

4.1 Fu et al. (2001)

Fu et al. (2001)は、(24)から英語の過程名詞は TP は含まないが VP は含むと主張する。(24a)は副詞 thoroughly が過程名詞 explanation を修飾する解釈が可能である。それに対し(24b)の thoroughly は結果

名詞 *version* を修飾することはできないが故に、(24b)は非文法的となる。したがって(24)は過程名詞が少なくとも VP の投射を含んでいる証拠といえる。

- (24) a. His explanation of the accident *thoroughly* (did not help him).
 b. * His *version* of the accident *thoroughly* (did not help him). (Fu et al. (2001: 555))

そして(25)は、文副詞は過程名詞を修飾できないことを表す。そのため過程名詞は TP を投射しないといえる。

- (25) * His explanation of the problem *fortunately* to the tenants (did not cause a riot.). (ibid. 556)

また(26)は形容詞と副詞が同一の過程名詞を修飾することができることを示す。ゆえに過程名詞はその内部構造として名詞構造と動詞構造を同時に合わせ持つ。

- (26) a. His *careful* destruction of the documents *immediately* (saved his reputation).
 b. His *thorough* presentation of the documents *carefully* (saved his reputation). (ibid. 554)

(24)から(26)までをまとめると、過程名詞は DP を主要部とし、その内部構造として VP を含むと Fu et al. は予測する。

さらにこの予測を支持するものとして Fu et al. は、過程名詞が *do so* の先行詞になることができる例を示す。一般的に *do so* は V よりも大きい動詞範疇を先行詞としてとると考えられている。(27a)では *did so* は TP を、(27b)では VP あるいは TP を先行詞としている。それに対し(27c)では *did so* が V を先行詞とするがゆえに非文法的となる。

- (27) a. He removed the garbage yesterday and I did so too.
 b. He removed the garbage yesterday and I did so too.
 c. He moved the green container and I did so the black container. (ibid. 571)

もし過程名詞が VP あるいは V を含むとするなら、過程名詞は *do so* の先行詞として機能できるはずである。この予測は(28)が文法的であることから支持される。

- (28) a. Sam's destruction of his documents this morning was preceded by Bill's doing so.
 b. His removal of the garbage in the morning and Sam's doing so in the afternoon were surprising. (ibid. 571)

これらの理由から Fu et al. (2001)は過程名詞は DP を主要部とし、内部構造に VP を含むと主張する。

4.2 vp-VP 仮説: Arimura (2008)

Arimura (2008)は Fu et al. (2001)らによる分析を遡及的派生名詞へ適用し、遡及的派生名詞もまた

VP を内在すると主張する。その根拠として Arimura は以下の2つの理由を挙げる。1つ目の理由は、(29)に示すように目的節が逡及的派生名詞に付加できることである。

- (29) a. The ancient city deserves reconstruction to promote touring economics.
 b. Accounting and audit laws deserve evaluation to reflect current prudent practices and international standards. (Arimura (2008: 17))

目的節はVPに付加すると仮定する Hornstein (2011: 114)に従うならば、(29)において目的節は派生名詞内のVPに付加していることになる。また目的節の主語が理解された主語(the understood subject)に支配されるとすれば、(29)の文法性は逡及的派生名詞がvPを含む可能性があることを Arimura は示唆する。

2つ目の理由は(30)に示すように逡及的派生名詞もdo soの先行詞になることができることである。

- (30) a. These laws need/could use interpretation, but the basic spirit behind them will undoubtedly be modified by doing so.
 b. The garbage need removal by refuse collectors as soon as possible in the morning so that they can make the street look clean by doing so.
 c. This scoundrel deserves a prompt conviction by the jury; I believe that there is no alternative to doing so. (ibid.: 17)

(29), (30)から逡及的派生名詞はVPを内在するという予測を支持する証拠といえる。このため Arimura は、逡及的派生名詞はその内部構造としてvP-VP階層を持つ(31)の構造を提案する。

- (31) ... deserve [DP D [NP Object [N -tion][vP v [VP V Object]]] (ibid.)
-

5. 提案と問題点

3節において、逡及的派生名詞は単純出来事名詞であると主張し、4節で Arimura (2008)による逡及的派生名詞に対するvp-VP仮説を見た。これをふまえて5節では、逡及的派生名詞はvP-VP構造を内在する複合出来事名詞であるという Arimura の主張を修正し、それはvP-VP構造を内在する単純出来事名詞であると提案する。

以上が結論であるが、以下で2つの問題点を挙げて本稿を結ぶ。1つ目の問題として、逡及的派生名詞は(21)に示したように不定冠詞aや量化詞someを伴うことはできるが、その一方で(32)に示すように複数化は許されない。

- (32) a. * We believe that the whole bureaucracy needs *thorough shake-ups*. (cf. Arimura (2008: 19))
 b. * The baby could use some attentions. (cf. Clark (1990: 52))

(32a, b, c)=(6a), (10b), (12b))がそれぞれ示すように、単純出来事名詞は複数化が許されるため、(32)の非文法性は逡及的派生名詞を単純出来事名詞と分析する際の反例になる可能性がある。

- (33) a. The assignments were long. (Grimshaw (1990: 54))
 b. Frequent/constant department elections occurred last year. (cf. Snyder (1998: 129))
 c. Several/three elections occurred last year. (ibid.: 127)

2つ目は、Arimura (2008: 19)で指摘されるように、遡及的派生名詞句内に生じる副詞は容認されないという問題である。これは遡及的派生名詞が VP を内在するという本稿の主張と矛盾してしまう。

- (34) a. * The natural environment requires reconstruction and development immediately.
 b. * The laws need/could use reinterpretation carefully by the lawyers.
 c. * This initiative reevaluation so highly that ... (Arimura (2008: 19))

以上の2つが本稿で導き出した結論と一致しない点である。

脚注

- 1 遡及的な解釈を許す worth の統語構造と歴史的発達については杉浦(2011)を参照のこと。
- 2 本稿では look after は複合動詞として再分析されていると仮定する。
- 3 Grimshaw は複合出来事名詞を従来の過程名詞に、単純出来事名詞を従来の結果名詞にそれぞれ対応させている。しかし単純出来事名詞は結果名詞と異なる場合もあると Grimshaw は述べる。(ib)の examination は「試験用紙・問題用紙」を意味する結果名詞ではなく、「検査」を意味する単純出来事名詞である。Grimshaw は単純出来事名詞を、of 句を伴わない派生名詞とみなしていると思われる。
 (i) a. The doctor's examination of the patient took a long time.
 [complex event nominal]
 b. The doctor's examination took a long time.
 [simple event nominal] (Tailor. (1996: 177))
- 4 Hornstein (1977: 148, fn.2)に基づく。
- 5 遡及的派生名詞は複数化できないことはここでの分析の反例になる可能性があるが、この問題は今後の課題とする。

参考文献

- 秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』 ひつじ書房 東京。
 有村兼彬(2008) 「名詞表現における目的語解釈」 *JELS* 25, 11-20,
 Bolinger, Dwight (1975) *Aspects of Language*, 2nd edition, Harcourt Brace Jovanovich, New York.
 Clark Lee Robin (1990) *Thematic Theory in Syntax and Interpretation*, Routledge, London and New York.
 Fu Jinqui, Thomas Roeper and Hagit Borer (2001) "The VP within Process Nominals: Evidence from Adverbs and the VP Anaphor do-so," *Natural Language and Linguistic Theory* 19, 549-582.
 Grimshaw, Jane (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge, MA.
 Hornstein, Norbert (1977) "S and X' Convention," *Linguistic Analysis* 3, 137-176.
 Hornstein, Norbert (2001) *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Blackwell, Oxford.

- Miller, Gary, D. (2002) *Nonfinite Structures in Theory and Change*, Oxford University Press, Oxford.
- Safir, Ken (1991) "Evaluative Predicates and the Representation of Implicit Arguments," *Principles and Parameters in Comparative Grammar*, ed. by Robert Freidin, 99-131, MIT Press, Cambridge, MA.
- Snyder, William (1998) "On the Aspectual Properties of English Derived Nominals," *MIT Working Papers in Linguistics* 32, 125-139.
- Sugiura, Katsuya (2011) "Some Notes on the Historical Development of Retroactive Gerunds," *Linguistics and Philology* 30, 125-146.
- Taylor, John R (1996) *Possessives in English: An Exploration in Cognitive Grammar*, Clarendon Press, Oxford.

(すぎうら かつや/名古屋大学文学研究科博士後期課程英語学専攻)